

元 氣 の 源 通 信	特定社労士・経営士 深川順次 福岡市博多区比恵町 11-7-701 TEL092-409-9257 FAX092-409-9258
人事労務・社会保険等手続き・助成金・給与計算	
(今月の言葉)『燃える闘魂』に学ぶ ① 「燃える闘魂」の必要性 ② 「燃える闘魂」の経営 ③ 「燃える闘魂」にも徳が必要	

2014年1月号(第132号)

「経営にはいかなる格闘技にもまさる闘争心が必要」(稲盛和夫)

京セラを零細企業から売上高1兆3千億円の超大企業に育て、巨大企業NTTに対抗して第2電電(現KDDI)をつくり、更に破綻した日本航空を2年で再建した稲盛さんにとって、現在の日本の経営者は物足りないのでしょうか。81歳にして『燃える闘魂』(毎日新聞社刊)を書いています。

「不屈不撓の一心をもつ」「激しい闘争心を燃やす」「強烈な願望を抱く」「誰にも負けない努力をする」等々と日本の経営者を叱咤激励しています。『燃える闘魂』はまさに日本の経営者に奮起を促す檄文です。

「人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力」、これは稲盛さんが常日頃言っていることです。

今回は、この「熱意」に焦点を当てた「燃える闘魂」から学んでいきたいと思います。

『燃える闘魂』に学ぶ

「燃える闘魂」の必要性

「日本経済はなぜ衰退したのか」

稲盛さんの危機意識は深いものがあります。米金融大手のゴールドマン・サックスによると今後も日本経済は低成長が続き、2050年にはロシアやインド、ブラジルなどのBRICs諸国のみならず、インドネシアやメキシコの後塵を拝するとしています。実際かつて世界を席卷したエレクトロニクス産業は軒並み苦境に陥っています。

一方お隣の中国や韓国の躍進が著しい。中国はGDP(国内総生産)で日本を抜き世界第2位となり、韓国は1997年の国家存亡の危機を乗り越え飛躍的に発展しています。

稲盛さんは言います。多くの経営者が業績不振の理由を経済環境や市場動向などの外的要因(いわゆる「6重苦」)に求めているが、そうではない。一番足りないのは「不屈不撓の心である。何があろうとも、どんな障害があろうとも、それを乗り越えていくという強い意志、勇気、気概が日本企業のリーダーに欠けていたことが、現在の停滞感、閉塞感漂う日本の経済社会をもたらした真因」「いま日本に必要なのはこの『負けてたまるか』という強い思い、いわば『燃える闘魂』」だ。

ところで中国では盛和塾(稲盛和夫塾長)が燎原の火のごとく広がっています。普及活動が始まって3年しかたっていませんが、塾生は1500人に上るといいます。そこでの合言葉は「稲盛前」「稲盛後」だそうです。つまり稲盛哲学を学んで経営観と経営手法がどのように変わったのか、どのように業績がのびたのかということを表示しています。「仕事が多少できなくとも許すが、稲盛哲学を勉強しないと私は絶対に許さない」これはある中国人経営者の言葉です。まさに稲盛哲学を貪欲に吸収し企業の成長に結び付けているのです。

日本も負けれない! 「燃える経営者」に変身することが求められています。

「燃える闘魂」の経営

では、稲盛さんの言う「燃える闘魂の経営」とはどのようなものでしょうか。

(1) 勝利まで闘い抜く闘争心

稲盛さんは、京セラがちっぽけなときから「京都一になろう、京都一になったら日本一になろう、日本一になったら世界一になろう」と社員に説き続けたといっています。更に次のようにも説いています。

「たとえてみれば京セラは日本の企業マラソンに遅れて加わったようなものだ。スタートは1945年8月15日、終戦のときに一斉にみんなが走りだした。京セラを創業した1959年というのは、それから14年経っている。ただでさえ距離でいうと14キロも離されているのに一流でもない選手がチンタラチンタラ走っているのは勝負にもならない。だから、とにかく全力疾走で走ってみようではないか」こうして寝る間もおしめ、夜を日に継いで全力で働いてきたといいます。

同時に、他社がしり込みするどんな難しい注文も「できます」と受注し、身の丈以上の製品開発に挑戦し、苦心惨憺してつくりあげ、お客様に納品していきました。

稲盛さんの製品開発への思い入れはすさまじいものがありました。それを表現している言葉に次のようなものがあります、①製品を抱いて寝たいという思い、②製品の泣き声に耳を澄ましてみる、③手の切れるような製品をつくる、などです。

こうして京セラをファインセラミックスの分野では世界一といわれる企業に育てたのです。

(2) 経営目標を共有する

「燃える闘魂」が経営者だけのものであれば高い経営目標を実現することはできない。なんとしても従業員と経営目標を共有することが大切です。

そのためにはいろいろな創意工夫が必要だといいます。まずなによりも経営者自身が燃える闘魂をもって、経営目標に邁進するとともに、ことあるごとに繰り返し、口が酸っぱくなるほど話をする事です。稲盛さんはよくコンパなど一杯飲む機会を設け、酒を酌み交わしながら「今年は〇〇ぐらい売り上げを伸ばそう」と切り出したといいます。

またあるときは「月間売上10億円を目指そう。目標を達成できたら、全社員を香港に連れて行く。できなかつたら、全員で禅寺で修業だ」と奮起を促しています。すると、みんな頑張り、その高い目標を達成することができて、飛行機をチャーターして二泊三日の旅行を行い、従業員との絆を更に強固なものにすることができたといいます。

何よりも大切なのは、なんとしても目標を実現したいという経営者の必死の思いと行動です。

以上2点以外にも稲盛さんは「命を賭して集団を守る」「不況を成長のチャンスとする」などを「燃える闘魂」の経営としてあげています。

「燃える闘魂」にも徳が必要

「燃える闘魂」で経営目標を実現する。ではなんのために？

稲盛さんは経営者の私利私欲のためであってはならないと強調し、利己的な欲望に基づくアメリカ型の強欲資本主義を痛烈に批判しています。アメリカは文字通りの「格差社会」です。一部の巨万の富を得る層と膨大な貧困層。日本でもこの「格差社会」が進展しています。

稲盛さんは「世界的な社会秩序の崩壊につながりかねない」と危惧し、これに「正しい倫理観や強い道徳観」を対置しています。「欲望にもとづく経営は必ず破綻する。利益を得るにも人間として正しい道を貫かなければならない。そのベースは他者を思いやる『利他の心』と『仁』と『義』すなわち『徳』である。従業員に対する愛、顧客に対する奉仕、そして社会に対する貢献がなければ、永続的に繁栄する経営はできない」と。つまり「経営は世のため人のために行う」「足るを知るといふ方向への心の転換が必要」と強調しています。

また、「全従業員の物心両面の幸福を追求し、同時に社会の進歩発展に貢献すること」という経営理念を京セラでつくり、日本航空にも導入しました。この「全従業員の物心両面の幸福を追求する」を冒頭に掲げることによって、日本航空でも多くの社員が「日本航空はわれわれの会社だ。そうであれば、必死になって会社を守り、立派にしていこう」ととらえ、求心力を高めることにつながったといいます。

稲盛さんはいいます。「『全従業員の物心両面の幸福を追求する』という会社の目的は、経営者の私利私欲を超えた従業員のための公のものであり、まさに大義なのであります。この大義というものが、人を動かす大きな力を持っているんです。従業員を幸福にしていきたいという企業目的には、企業に集うみんなが共感し、共有することが可能でした。ここにやましいことは一切ありませんから、経営者である私自身も、この目的追及のために一切躊躇なく、取り組むことができたのです」